

源太が怒つて帰りし後、腕拱こまめきて茫然たる夫の顔をさし覗きて、吐息つくづくお浪は歎じ、親方様は怒らする仕事は畢竟つまり手に入らず、夜の眼も合さず雛形こしらまで製造へた幾日の骨折も苦勞も無益むだにした揚句の果に他の氣持ひてを悪うして、恩知らず人情無しと人の口端にかゝるのは余りといへば情無い、女の差出た事をいふと唯一口に云はるゝか知らねど、正直律義も程のあるもの、親方様が彼程あれほどに云ふて下さる異見について一緒に仕たとて恥辱はじにはなるまいに、偏僻かたいし張つて何の詰らぬ意氣地立て、それを誰が感心なと褒ませう、親方様の御料簡につけば第一御恩ある親方の御心持もよい訳、またお前の名も上り苦勞骨折の甲斐も立つ訳、三方四方みな好いに何故其氣にはならぬか、少しもお前の料簡が妾の腹には合点のみこめぬ、能くまあ思案仕直して親方様の御異見について従ふては下されぬか、お前が分別さへ更れば妾が直にも親方様のところへ行き、何にか彼にか謝罪あやまり云ふて一生懸命精一杯、打たれても擲かれても動くまい程覺悟をきめ、謝罪つて謝罪つて謝罪り貰ぬいたら御情深い親方様が、まさかは何日まで怒つてばかりも居られまい、一時の料簡違ひは堪忍かにして下さる事もあらう、分別仕更て意地張らずに、親方様の云はれた通り仕て見る気にはならぬか、と夫思ひの一筋に口説くも女の道理もつとせなれど、十兵衛はなほ眼も動かさず、あゝもう云ふてくれるな、ああ、五重塔とも云ふてくれるな、よしない事を思ひたつて成程恩知らずとも云はれう人情なしとも云はれう、それも十兵衛の分別が足らいで出来したこと、今更何共是非が無い、然し汝の云ふやうに思案仕更るは何しても厭、十兵衛が仕事に手下は使はうが助言は頼むまい、人の仕事の手下になつて使はれはせうが助言はすまい、榊組も椽配たるきわりも我が為る日には我の勝手、何所から何所まで一寸たりとも人の指揮さしずは決して受けぬ、善いも悪いも一人で背負つて立つ、他の仕事に使はれゝば唯正直の手間取りとなつて渡されただけの事するばかり、生意氣な差出口は夢にもすまい、自分おのが主でも無い癖に自己が葉色を際立てゝ異かわつた風を誇顔の寄生木は十兵衛の虫が好かぬ、人の仕事に寄生木となるも厭なら我が仕事に寄生木を容るゝも虫が嫌へば是非がない、和しい源太親方が義理人情を噛み砕いて態々わざわざ懇懇すすめて下さるは我にも解つてありがたいが、なまじひ我の心を生して寄生木あしらひは情無い、十兵衛は馬鹿でもものつそりでもよい、寄生木になつて栄えるは嫌きらいぢや、矮小けちしたくさな下草になつて枯れもせう大樹おおきを頼たのまば肥料いやしにもならうが、たゞ寄生木になつて高く止まる奴等を日頃いくらも見ては卑ひい奴めと心中で蔑視みさげて居たに、今我が自然親方の情に甘へて其になるのは如何あつても小恥しうてなりきれぬは、いつその事に親方の指揮のとほり此を削れ彼を挽あき割れと使はるゝなら嬉しけれど、なまじ情が却つて悲しい、汝も定めて解らぬ奴と恨みもせうが堪忍して呉れ、ゑゝ是非がない、解らぬところが十兵衛だ、此所がのつそりだ、馬鹿だ、白痴漢たわけだ、何と云はれても仕方は無いは、あゝ火も小くなつて寒うなつた、もうもう寝ても仕舞はうよ、と聴けば一々道理の述懐。お浪もかへす言葉なく無言となれば、尚寒ひさまき一室を照せる行燈も灯花ちよつじに暗うなりにけり。